



## ARTRAMBLE

## 学芸員の視点1 ②③

「兵庫の書」覚え書き

—「兵庫のベスト・オブ・ベスト」としての「書」

—— 剣持翔伍

## 学芸員の視点2 ④⑤

住宅と空間をめぐる、あれこれ

—— 林 優

## ショート・エッセイ ⑥

2025県展について

—— 飯尾由貴子

## トピックス ⑦

リビング・モダニティ展関連事業

こどものイベントの新春企画！

コレクション展II関連事業

## 美術館の周縁 ⑧

研究をつなぐアーカイブ—小澤文庫

—— 橋本こずえ

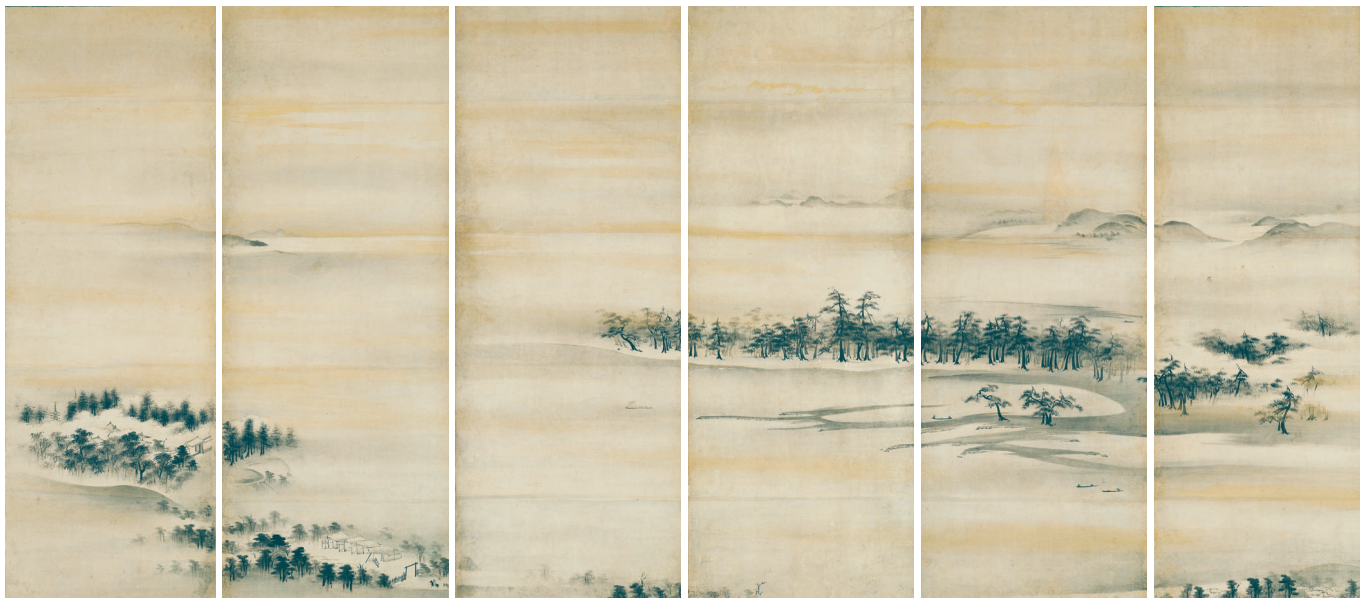
## コレクションから

富士山を望む景勝の地、三保の松原（静岡県）。平安の時代より親しまれるこの聖地は、天女伝説の舞台としても名高く、今日まで多彩な芸術を生み出す源泉となってきました。その名勝を墨の豊かな諧調で描き出した本作は、中景に海岸線に沿って続く松林と雄大な駿河湾を配し、遠景には霞の彼方に伊豆の連山がおぼろげに浮かび上がるなど、奥行きのある空間が広がります。また、近景には名所旧跡の清見関や清見寺が描かれています。現在は6幅の掛軸に改装されていますが、元来は「富士山図」と対をなす六曲一双の屏風であったとされています。近年の研究では、全6幅のうち第1～4幅が右隻、第5・6幅が左隻に該当するとの指摘もなされています。祖本に基づく中国山水表現が主流であった室町水墨画において、日本の名勝の実景描写を試みた本作は、極めて価値の高い作例といえます。

伝承筆者の能阿弥は室町幕府の同朋衆として将軍足利義教・義政に仕え、唐物の鑑定や管理、諸道具の座敷飾りを担当するなど芸術顧問的な立場で活躍しました。

旧箱の蓋表には、5代将軍・徳川綱吉（常憲院）が所有していたことを示す墨書が残されています。明治・大正期には、日本の美術行政の礎を築いた九鬼隆一（現・兵庫県三田市出身）の藏品として脚光を浴びました。その後、平尾喜三郎や藤井徳義といった収集家らの手を経て、昭和30年頃に4代頼川徳助の所蔵となりました。長らく頼川美術館の至宝として守られてきた本作は、現在、兵庫県立美術館のコレクションとして受け継がれています。

(柏木知子/当館学芸員)



伝 能阿弥(1397-1471)

〈三保松原図〉

室町時代（15世紀）

紙本墨画、6幅

縦154.1-155.3cm 横54.7-59.6cm

重要文化財

令和元年度公益財団法人頼川美術館寄贈 令和3年度収蔵（頼川コレクション）

# 「兵庫の書」覚え書き

## ―「兵庫のベスト・オブ・ベスト」としての「書」

### 剣持翔伍

「兵庫の書」展Ⅱ「兵庫のベスト・オブ・ベスト」の開催にあたり、本展の企画・制作に携わった方々にお話を伺った。本展の開催にあたり、本展の企画・制作に携わった方々にお話を伺った。

2025年度のコレクション展Ⅱ「兵庫のベスト・オブ・ベスト」（会期：2026年1月14日～4月5日）が開幕した。本展は2階展示室が先行して1月14日にオープン、今回から3階に移動したメイン会場は1月27日にスタートした。常設展示室6では、2月15日まで「特集 瀬川コレクションの名品」として、同コレクションの受贈記念展（2021年4月～7月）以来およそ4年ぶりに、重要文化財4件・重要美術品4件を含む全31件を一挙公開。鎌倉時代から江戸時代の古美術が並ぶ特集展示には、会期中の大寒波や吹雪にもまげず多くのファンが詰めかけた。そのバトンを受けて、丙午歳の春節を迎えてまもない2月18日、同室において「兵庫の書」（以下、本展）が開幕した。本展は「兵庫のベスト・オブ・ベスト」の一部として、兵庫県ゆかりの書を中心とした作品・作家に焦点をあてた展示である。本稿では、覚え書きとして本展の出品作や作品選定の意図を記録したい。

本展の核となったのは、兵庫県は現在の三木市出身の作家である上田桑鳩そうきゆう（1899-1968）の作品群で、ご遺族からご寄贈いただいた4件に館藏品2件を出品。さらに同じく兵庫出身の宇野雪村せつそん（1912-1995）と森田子龍しりゅう（1912-1998）の作品も交えて、いわゆる「前衛書」を中心に兵庫の書の一側面を垣間見ることが意図した。後述するが、本展では書作品のみならず、上田らと同時期に活動した画家の作品も展示した。当該画家の作品は3階展示室にも出品されており、コレクション展Ⅱ全体の連関も意識している。まずは上田桑鳩の略歴を概観しつつ、順に展示ラインナップをみてゆくことにしよう。

旧吉川町に生まれた上田桑鳩は三田中学校を卒業、結婚後は宝塚の紅葉谷に居住したことに因み「錦谷」という号で書作に取り組む。書で生きることが決意して上京、やがて「現代書の父」と称された比田井天来ひだいてんらい（1872-1939）の第1号の弟子となり、「桑鳩」と改号した。師の薫陶を受けて戦後の日本に「現代の書」を希求し、同門の同志らを牽引する立場となる。作者の個性や感情、書の線質を貴ぶ上田の態度は、従来伝統や価値観に囚われず、時に文字の可読性を意にかけないことがあった。こうした作風は「前衛書」と称され、上田はそのパイオニアと呼ばれることもある。師の没後は独立して書団体である奎星会けいせいかいを創設（1940年）、旺盛な創作活動を展開した。そうしたなか誕生した作品が、第7回日本美術展覧会（日展）の出品作《愛》（1951年）であった。

本展会場で来場者を出迎える《愛》は、淡墨で「品」と読める一字を揮毫し、二曲一隻屏風に仕立てた作品。上田は自ら本作の「解説」<sup>1</sup>において、

一年ばかり前から私の脳中に岩か雲のような形の想影が去来し、それを表現したかった。それには品字が最も適していたので、これを用いること

に決めたものの、その形を如何にするかを決しかねていた。今度孫が生まれ、人とも獣とも分らぬような醜くも、あどけない、赤ん坊の顔を見ているうちに、強い愛情を覚えること、ともに決定しなかった品字の形が決つた。それは祖父が生まれたての孫に対する愛の衝動を表徴する私としての形であつた。

と述べるように、かねてより構想していた造形に、生まれたばかりの孫娘が口を大きく開けて泣く愛らしい姿を重ね合わせて完成した作という。日展ではその書かれた内容とタイトルの不一致が物議を醸し、この騒動は上田の日展脱退（1955年）の契機となった。当該作は美術作品の内容とタイトル、表現をめぐる議論を惹起し、ひいては本来読める文字を素材とする「書」のアイデンティティを世に問うた。《愛》は戦後の書道史のみならず、美術史にも大きなインパクトを与えた話題作であり、作家の代表作として広く知られている。

本展では、この《愛》と同時に制作された《愛》（別作）を並べて展示した。作家が日展出品作の選定で家族に意見を求めた際、家族が選んだのが別作であった。その想いを考慮した上田は、《愛》とともに別作も家族に託し、将来は着想のモデルとなった孫娘に与えるようにと念を込めて書簡をしたためている。別作は、記念碑的な作品《愛》の制作背景を紐解き、作家の人間性を伝えるものとしても大きな価値を有する。会場では双方の表現を比較しながら鑑賞することで、書作品の制作や選定の過程を追体験できることを意図した（図1）。

次は、上田による1950年代の挑戦的な大作2点。《読臨》<sup>りくめう</sup>は「感事六言」中の一節に取材した12文字を大字で揮毫した、圧倒的な存在感を放つ六曲一隻の屏風作品で、記念すべき第1回奎星展（1952年、東京都美術館）出品作の1点である。篆書や隷書の字形を手掛かりとしつつ、大胆かつユニークにデフォルメした本作からは、作家として独立し新たな書表現に邁進せんとする気概が濃厚に窺える。一方の《多情仏心》は、前衛書家が集った第1回前衛書代表作家展（1958年、東京・そごう）の出品作で、《読臨》とは好対照に淡墨と余白を活かし、「多情仏心」の語から連想される世界観を表現したのだろうか。いずれの作も当時の上田の言論を念頭に置けば、書が造形芸術であり身体表現としての側面を有することを観るものに訴えかけてくるようである。

これらにあわせて配置したのは、上田の門弟であった宇野雪村と森田子龍の作品。宇野は現・新温泉町、森田は豊岡市と兵庫県北部が郷里の同年生まれの2人の書家は、早くから上田に師事し、実作・理論の双方で門人の中心的な役割を果たした。宇野の《向寒山》・《FUN（奮）》はともに「宇野雪村書



図1：会場風景 《愛》（右）と《愛》の別作（左）



図2：会場風景 須田尠太（右）と津高和一（左）

業展」（1983年、日本橋・三越本店）への書き下ろし作で、いずれも漢字の造形をリズムカルにアレンジし、色のついた紙や墨の潤濁が作品の視覚効果を増強させている。森田《蕭々》（1965年）は、四曲一隻屏風に美しい淡墨を用いて揮毫した優品。本作の見どころである余白と画面構成の妙は、「蕭々」の語が持つイメージを拡張して作品への没入感を演出する。両者の作品は、上田の試みた新たな書表現を発展的に継承した成果とみることができようか。

当館藏品に上田桑鳩没年の1968年作の2点がある。いずれも神戸三ノ宮・そごう（現・神戸阪急）で開催された大規模な回顧展「現代書道の巨匠 上田桑鳩展」（1982年）の出品作で、宇野雪村が上田の作品を兵庫県に遺すべく選定し、代表を務める飛雲会の名義で当館へ寄贈されたと伝わる。《啼鳥》は淡墨を用いて余白と立体感を効果的に構築し、無駄をそぎ落として寂寥感すら醸し出す诗情豊かな作品。《茶碗・賛》は、画面下部に自作の茶碗の画を、上部の賛（書）には「人生の楽事」の到達点を自覚しつつ、ふと恩師と両親の顔が思い浮かんだ終末の感慨を記す。特に後者は、その賛の内容のみならず、画に書、さらに晩年は丹波（立杭）を拠点に陶芸を愉しんだ表現者・上田の人生を象徴する1点である。

次に、上田桑鳩のもとを去った門弟の表現をみてみよう。森田子龍と井上有一（東京出身、1916-1985）はかつて上田に師事したが1952年に袂を分かち、墨人会を創設して新たな活動をおこなった。彼らは独自の墨液を書作に導入して毛筆の軌跡を可視化し、少数数の漢字を題材として絵画的に画面を構成する表現が多い。間近で鑑賞すると筆の動きが明瞭な井上《鷹》（1981年）にそれが顕著だろう。森田《坐俎上》は「日本の建築と書」展（1953年、ニューヨーク近代美術館）に出品された、師のもとを去ってまもなくの出世作の1つ。その隣には、森田が独自に発明した、「漆金」と呼ばれる黒紙にアルミ粉と漆を用いた技法の目に鮮やかな大作《虎》（1967年）を配した。これらの作品からは、上田が晩年に試みた墨塗の折帖への臨書作や、いわゆる「彩書」と呼ばれるカラフルな顔彩を用いた書作品が想起され、作家たちの表現や意識に共通項が浮かび上がる。

続けて、森田や井上と密接に交友した画家たちの作品を展示した。森田が主幹となった雑誌「墨美」において濃厚な影響関係が見て取れる吉原治良じろう（1905-1972）や須田尠太こくた（1906-1990）、津高和一つたかわいち（1911-1995）の書的な要素と筆致を用いた作を選定（図2）。一部の書家が前衛芸術家たちと交流を深め、西洋美学や哲学理論を積極的に吸収し自作に反映した時期の一端を提示した。ところで、上田桑鳩も彼らの表現と相互に影響を与え合っている。例えば、上田は須田の個展（1950年、日本橋・三越本店）を参観し、その1点の絵画から中国・後漢時代の摩崖刻石である「開通褒斜通碑」（紀元66

年）を連想している<sup>2</sup>。かつて「原始と書」・「統原始と書」（1950年）<sup>3</sup>を執筆した須田の絵画において、書の線の使用を得心し感動したのだった。これらは、兵庫県ゆかりの前衛作家たちによる書と絵画の蜜月な時代の貴重なワンシーンとして銘記される。

最後に、当時の書表現を映し出す1つの手掛かりとして、ジョルジュ・マチウ（1921-2012）の作品を取り上げた。1957年に「日本の書道との対決」をすべくフランスから来日、銀座でアクション・ペインティングをして個展を開催した。本展の出品作《〈（無題）〉もそのうちの1点で、日本での制作時の写真も残る<sup>4</sup>。上田桑鳩はマチウの活動とアンフォルメルな作を（やや批判的に）注視しており、西洋人との比較を通じて、東洋人による「書」の特質を自覚しているのは面白い<sup>5</sup>。書的筆致を作品に導入したと評されるマチウらの実践は、上述した日本の作家たちの国内外における活躍や存在感の証左だろう。

以上、本展のラインナップを上田桑鳩の存在、それとの関わりを核に述べてみた。担当者として強調したいのは、作品の優劣や作家の知名度の高さよりも、兵庫県が近現代の書に重要な作家を数多く輩出する拠点となり、彼らが多様な交流を通じて日本・世界へ羽ばたいていった事実である。なぜ兵庫県にこれだけ前衛書・墨象の重要な作家が誕生したのかに対して明瞭な答えを出すのは容易ではないが、上田桑鳩という作家を中心に、彼らを育み飛躍の土壌となった地域性が起因することは間違いない。これが、本展が「兵庫のベスト・オブ・ベスト」の一角を担うゆえんである。こうした兵庫県の特性は、本展で触れられなかった「かな書」においても同様で、兵庫県は現代においてもなお、書のメッカと言って差し支えなからう。このような兵庫の書文化を醸成する一要因となった、1868年の兵庫開港以降に一層盛んとなった中国文化の受容、そして神戸周辺が日本最初期の美術館・博物館を数多く擁した文化的・美術史的意義については別稿で論じることにした。

2026年秋、「書道」がユネスコ無形文化遺産に登録される見込みである。書道が国や地域の「文化遺産」であることが証明されようとしている。日本を代表する書道大国である兵庫県において、県立美術館の果たす役割はますます大きくなってゆくだろう。今後とも、広い視野から書の収集や公開、研究に取り組んでゆきたい。

（けんもち・しょうご／当館学芸員）

注記：引用はすべて新字体に直した。

- 『第七回 日展集』（美術工芸会、1951年）
- 『書之美』33号（研精会、1951年）、上田桑鳩「須田尠太氏の個展をみて」
- 『書之美』29号・31号（研精会、1950年）
- 『芸術新潮』第八巻第十号（新潮社、1957年）、「書道との対決」（関く人・今井俊満）。なお、東京国立近代美術館に当該作品が映った写真である、大辻清司（ジョルジュ・マチウ）（作品番号：Ph1679、1957（printed1998）、ゼラチン・シルバー・プリント）が所蔵されている。
- 上田桑鳩「書道鑑賞入門」（創元社、1963年）、「理論の部」の「書の特質について」

# 住宅と空間をめぐる、あれこれ

林 優



「ヴィラ・ル・ラク」窓辺の原寸大モックアップ



パウハウス関連展示



「スカイハウス」模型と映像、奥に「フィッシャー邸」窓辺の原寸大モックアップ

2025年9月20日から2026年1月4日まで、「リビング・モダニティ 住まいの実験 1920s-1970s」展を開催した。20世紀のモダン・ハウスをめぐる建築家の試みを再考するという趣旨のもと、建築家の岸和郎氏の企画・監修により、数年前から国立新美術館（以下、東京会場）で準備が進められ、関西の巡回先として当館が加わることとなった。当館としては2021年に開催した「アイノとアルヴァ 二人のアールト」展以来、4年ぶりの建築展である。以下、展示をめぐる所感を、設営時の奮闘を振り返りつつ記してみたい。

8月31日：会場施工開始。トラックが入れ替わりで高所作業車やリフト、コンパネ等の資材を搬入。並行して、展示室内の可動壁を展示プランに沿って移動。本展では、20世紀を代表するモダン・ハウスの中から、日本を含む世界各地の14邸の住宅をキー・ハウスと位置づけ、「衛生」「素材」「窓」「キッチン」「調度」「メディア」「ランドスケープ」という7つの観点から検証する。東京会場では、この7つの観点を「海」、14邸のキー・ハウスを「島」に見立てる展示プランが展開された。すなわち、各住宅の模型および図面、関連する写真、映像、家具、その他資料類が一つのまとまりとしてテーブル（＝島）上に展示され、7つの観点は各テーブルを取り囲むエリア（＝海）として設けられる。鑑賞者は「島」を起点に巡ることで、各住宅に内在する複数の観点を発見し、「海」を軸に巡ることで、異なる建築家や住宅を横断的に比較することができる、というものである。このため、東京会場では約2000㎡のワンルールの展示室にほとんど壁面を設けず、広大な「海」に浮かぶ「島」の間を鑑賞者が自由に回遊する方式がとられた。

翻って当館の展示室は、南北に細長い3つの部屋から成る。必然的にある程度経路を設けざるを得ず、「海」と「島」という展示イメージを効果的に展開できないため、巡回に際して展示構成を見直す必要があった。7つの観点をそのまま章立てとして用いる案もあったが、最終的に当館では14邸の住宅を年代順に展示するオーソドックスな構成を採用した。住宅同士の関係性は見えにくくなるが、ル・コルビュジエからフランク・ゲーリーまで、半世紀にわたるモダン・ハウスの流れが体感しやすいという利点もある。さらに、東京会場の4/5という展示面積にも対応すべく、展示アイテムの多くを占める写真パネルは、東京では各テーブルの上に平置きされていたものを、当館では壁面に展示することで省スペースを図った。

午後、木製のレンタルパレットの搬入。東京会場では、このパレットと天板を組み合わせたテーブルが各住宅の展示台として使用された。パレットは、会場構成を担当した建築家の長田直之氏の提案により、「モダニティ」の普及をうながした物流を象徴するアイテムとして採用されたもの。当館もこれを引継

ぎ、天板を再利用しながら、椅子などの調度類や住宅模型の展示台として使用した。結果として、平面のものは壁、立体物は展示台、資料類は展示ケースという、美術館定番の展示方法に立ち戻る形となった。

9月1日：「メゾン・ド・ヴェール」映像プロジェクションルームのトラス設置および仮設壁の造作開始。

「メゾン・ド・ヴェール」（1932年）は、ピエール・シャローがバリの古いアパルトマンを改装し、長年親交のあった医師夫妻のクリニック兼住宅としてリノベーションしたもの。ディラー・スコフィディオ+レンフロ（DS+R）が制作したショートフィルムでは、床に置かれた平面図上を動くレーザーの線に沿って、住宅の断面がCTスキャンのようにスクリーンに映し出され、そこに暮らす夫婦の一場面が展開される。

今回、思いがけず大掛かりな施工となったのがこの映像ルームで、5台のプロジェクターを適切な位置に設置するための吊元が既存設備では確保できず、トラスを仮設して対応することとなった。複数の高所用リフトに載せられた部材が、掛け声とともに同時に持ち上げられ、システムティックに組み立てられていく様子は圧巻。あっという間にライブ会場さながらのトラスが出現した。プロジェクターを吊るす梁を除き、支柱部分は仮設壁で覆って隠す。

9月3日：「ヴィラ・ル・ラク」窓辺の原寸大モックアップ（模型）の造作。

「ヴィラ・ル・ラク」（1923年）は、ル・コルビュジエが36歳のときに、スイス、レマン湖の畔に両親のために建てた住宅。11mの水平連続窓を原寸大で再現したモックアップは、展覧会の冒頭を飾る見どころの一つである。窓越しに会場を見渡せる構成は東京会場を踏襲。一方、当館では入口すぐに設けられたこのモックアップに至るアプローチとして、展示室を囲む回廊を経由する動線とした。当館の設計者である安藤忠雄氏が建築を志した頃、ル・コルビュジエの作品集に出会って大きな衝撃を受け、その図面を何度もトレースしたというエピソードは有名であるが、ガラスウォールの回廊からは、その安藤氏の建築を紹介するAndo Galleryの建物を望むことができる。回廊には7つの観点についての解説を記したバナーと、展示の概要を示したメッセージを置き、イントロダクションとした。

原寸大のモックアップとしてはもう一つ、ルイス・カーンによる「フィッシャー邸」（1967年）の居間の窓辺を再現したものを展示した。「ヴィラ・ル・ラク」の水平方向の窓と対照的に、こちらは垂直に伸びる窓である。眺望を得る大きなはめごろしの窓と換気用の開閉窓が、つくりつけのベンチと組み合わせられ、心地よい空間をつくり上げている。高さ約5mのモックアップは、東京会場で製

作されたものを複数のパーツに分解し、組立て直したもので、こちらは巨大プラモデルの要領で、予想より順調に設置できた。

9月8日：映像ルームのプロジェクター調整。前日までに仮設壁の造作・塗装、プロジェクターの設置を終え、ここから2日間+αかけて映像調整を行った。

9月13日：展示作業初日。作品を収蔵庫から展示室へ移動し、学芸員立会いのもと開梱、コンディションチェックを行う。

展示順に従い、まずパウハウスの関連作品から作業を始めた。1919年にドイツのヴァイマルに開校したパウハウスは、近代建築を語る上で欠かせない存在である。本展では「ヴィラ・ル・ラク」の窓辺を抜けた次の展示室に、パウハウスの授業における習作や工房制作の椅子、金属器、織物、『パウハウス叢書』などの出版物を展示した。年代順の構成としたことで、モダン・デザインの原点ともいえるパウハウスをハブとして、その影響が広がっていく様子が体感しやすくなったように思う。

展示は次に、藤井厚二こうじによる自邸「聴竹居」ちようちくきょ（1928年）へと移る。京都、大山崎の山腹に現存するこの住宅は、展覧会の巡回が決まった際、関西における木造モダニズム住宅の代表作として本展で取り上げることを当館が提案し、ゲスト・キュレーターのケン・タダシ・オオシマ氏の快諾を得てキー・ハウスに加わったもの。5回にわたる自邸の設計を通して、日本の気候風土に根ざした住宅とはどうあるべきかを追求した藤井の集大成である。藤井はこれらの実践から得られた知見を『日本の住宅』という理論書にまとめ、さらに1930年には英語版の『The Japanese Dwelling House』を著して、自らの考えを世界へ向けて発信した。

また、1888年生まれの藤井は、87年生まれのル・コルビュジエと同世代にあたり、「住宅は住むための機械である」というル・コルビュジエの有名な一節に対し、藤井が講演会で批判を行ったことも指摘されている。本展では、ル・コルビュジエが編集を手がけた雑誌「エスプリ・ヌーヴォー」や、1929年にバリのサロン・ドートンヌで発表された居住空間モデル「住宅インテリアの設備」に関連する椅子や写真パネルを、「聴竹居」および藤井の著作と同じ空間に展示し、両者の同時代性を示した。

9月14日：引き続き展示作業。前日に複数のトラブルが重なり、対応に追われてコンディションチェックはかどらず。他の学芸員の手を借りながら展示を進める。

「聴竹居」の展示スペースを抜けると、アンチームな雰囲気から一転、天井高7.2mの空間が広がり、ここからミース・ファン・デル・ローエの「トゥーゲントハ

ット邸」（1930年）、「メゾン・ド・ヴェール」の映像ルームへと続く。この日から奈良女子大学の学生さんたちが入り、リナ・ボ・バルディ「カサ・デ・ヴィドロ」（1951年）1/30模型の組み立て作業を開始。本展で展示した模型の多くが、こうした大学研究室の協力を得て新規製作されたものである。

9月16日：一向に終わる気配を見せない展示作業。この日は休館日のため、1階エントランスにサテライト展示予定の広瀬鎌二「SH-1」（1953年）鉄骨原寸モデルの設営を行った。広瀬の自邸である「SH-1」は、構造材に軽量鉄骨を用いた日本における先駆的な住宅。その原寸モデルを見ると、幅わずか40mmの鉄骨がボルト接合されただけの簡素なフレームに驚く。

9月18日：展示作業最終日。本展アソシエイト・キュレーターの佐々木啓氏と会場構成に協力いただいた長田氏けんじが来館、展示を確認いただく。

前日に組み立てた菊竹清訓きよのり、菊竹紀枝のりえ「スカイハウス」（1958年）1/10模型の建具の取り付け。開閉スライドさせることで換気と採光を調節する無双兩戸まで精巧に再現されている。東京会場では、1962年に居間の床下に増築された「子供部屋ムーブネット」の原寸大モックアップが、実際の高さと同じ5mの天井から吊り下げられたが、当館の展示室では再現が困難だったため、代わりに住宅の構造や当時の暮らしの様子を映したニュース映画をプロジェクターで大きく上映することで、ゆったりと視聴できるようにした。

約300点の写真パネルに600点超の解説・キャプションの設置という地味だが骨の折れる作業を何とか終え、照明チームのライティングも完了し、精根尽きて展示終了。

余談だが、本展で取り上げた14邸のキー・ハウスの中に安藤氏の建築は含まれていない。だが、本展の展示構成を検討する際も、また実際の展示作業においても、安藤氏が設計した展示空間そのものがつねに意識の前面にあった。2022年に、やはり国立新美術館との2館で「李禹煥リウファン」展を開催したとき、国立新美術館と異なり、兵庫県立美術館の展示室は「空間」だという趣旨の話を李氏がされていたことを最近知ったのだが、示唆に富む言葉だと思う。本展ではややトリッキーな経路を設定したことで、分かりにくいという不満の声もいただいた。「空間」には、まだまだ探求の余地がありそうだ。

（はやし・ゆう／当館学芸員）

# 2025県展について

飯尾由貴子



展覧会場入口

ショート・エッセイ 気候変動の影響が、年々厳しさを増す日本の夏。当館夏の恒例行事として定着してきた「県展」がついに夏を捨て、今年度は秋開催の運びとなった。本稿はその経緯と報告である。

気象庁のウェブサイトによると、2024（令和6）年神戸市の夏の平均気温は7月29.0℃、8月は29.4℃、最高気温の平均は7月32.1℃、8月33.5℃、さらに昨年の県展開催中はほぼ連日最高気温が35℃前後であり、8月14日は36.9℃にも上った。観測地点での数値がこれであるから、体感気温はもっと高かったと思う。

「県展」は、兵庫県教育委員会と神戸新聞社の主催により、美術の創作に従事する新人の発掘と育成を意図し1962（昭和37）年に開催された「兵庫県美術公募展」を前身としている。第1回目は日本画、洋画、彫塑、工芸、書の5部門で公募し、展覧会は旧そごう神戸店の催し場で6月20日から7月4日まで開催された。1970（昭和45）年に兵庫県立近代美術館が開館し、翌1971（昭和46）年の第10回展からは会場を美術館とし、神戸新聞社との共催で名称を「県展」と改め、毎年夏に行われるようになった。美術館の改修工事があった1981（昭和56）年と、コロナ禍の2020（令和2）年以外は（阪神・淡路大震災の年も）1度も中断することなく継続して開催してきており、2025（令和7）年で62回目を迎えた。

その間、1982（昭和57）年の第20回展で兵庫県が主催に加わり「知事賞」が創設された。2002（平成14）年の兵庫県立美術館の開館とともに会場は当館ギャラリーにいったん移されたが、翌2003（平成15）年からは原田の森ギャラリー（旧県立近代美術館）に会場が再び移り、兵庫県芸術文化協会が主催に加わった。2016（平成28）年に「原田の森ギャラリー」がリニューアル工事で休館した際には、県立美術館ギャラリーで開催、その翌年からは「原田の森ギャラリー」で、昨年まで開催されてきた。

さて、昨年のも暑かったが上に記したように2024年の夏も暑かった！県展の会期は8月中の2週間であるが、その前後に作品の受付（搬入）や返却（搬出）作業を行う。我らの県展は、学芸員をはじめ美術館職員、博物館実習生やミュージアム・ボランティアの協力も得ながら実施する美術館総出の事業である。作品受付や返却は7月後半から8月上・中旬の猛暑の時期に、原田の森ギャラリーの搬入口で行うが、皆首にタオルを巻き、汗だくになりながらの作業となる。作品を出品くださる方々にも大変なご負担をおかけすることになっていた。

加えて、会場が県立美術館とは違う場所であるため、当館から出張して「県展グッズ」と呼んでいる県展用の展示備品や事務用品を美術館から運ばなければならないが、こちらもかなりの負担となっていた。

そのような中、なんとか2024県展は終了したが、毎年のこととはいえ夏の

暑さが尋常ではなくなっている状況を鑑み、ついに県展を夏に開催する意義と必然性についての検討が行われることとなった。夏の県展を見直す、これが「秋の県展」への第一歩となり、その他の課題も含め関係者と協議を重ねた結果、当館のギャラリー棟3階のギャラリー（約800㎡）に会場を移し、時期も気候のよい11月に変更し、作品の受付、返却も当館で行うという運びになったのである。

そうして迎えた今年度の県展。会場は、原田の森ギャラリーの大展示室より少し小さくなった。会期は11月15日～11月30日の2週間。作品受付、返却も当館で行った。館内動線の都合上、2か所に分けて受付を設けたため、出品者の皆様には多少なりともご不便をおかけすることになったかもしれない。

公募と展覧会広報にあたっては、イメージの刷新を期し「H/ART」という愛称を導入、デザイナーを起用し、この文字をあしらったポスター（公募用と展覧会用の2種）とダイレクトメールを作成、関係各所に配布するなどの工夫も行った。

昨年度末（2025年3月）から、県展の会期と会場を変更する旨は当館ウェブサイトにて告知していたものの、実際の公募開始は9月であり、他の公募展との競合も懸念され、果たして従来通りの出品があるか心配があった。結果、応募点数は計428点、昨年度より155点減少、昨年度比71.6%となった。入選率は昨年度並みとしたため入選数は161点となった。夏の県展が何十年も定着していたことを考えると、時期の変更は、出品者の方々には少なからぬ影響があったと思われる。

一方で、天井高があるギャラリーでの開催により、作品の展示効果は向上したように思う。原田の森ギャラリーより若干狭いスペースであるため、全ての可動壁を使用して壁面を確保し、担当者の作品配置の工夫により、見ごたえのある展示となった。最終日に行う表彰式はKOBELCOミュージアムホールで催行した。来館者アンケートでは、2025県展の感想として「大変よかった」「よかった」との回答が95%にのぼった。

県展の開催意義について。筆者は他の自治体が実施するいくつかの県展に審査員として関わったことがある。ごくわずかな経験ではあるが、それらはすべて各県／市の「美術館」ではなくそれぞれの文化担当課の事業として行われており、美術館学芸員や職員が前面に出ていることはなかった。対して当館の県展は、美術館の主催事業として歴代学芸員と職員が身をもって携わり育ててきた事業、おそらく当館の学芸員は皆何らかの思い入れを持っている事業である。様々な事業が統廃合される昨今、我らが県展の行く末も定かでないが、来年度は開催されることになっている。2度目となる秋の県展、さらなる出品者増を目指し、我々学芸員、職員は精進する所存である。

（いいお・ゆきこ／当館学芸員）

## リビング・モダニティ展関連事業

展覧会開幕初日の9月20日、本展ゲスト・キュレーターのケン・タダシ・オオシマ氏による記念講演会「リビング・モダニティ：過去から現在、そして未来へ」を開催しました。20世紀に始まった住宅をめぐる革新的な試みが、現代にどう引き継がれ、未来の暮らしにどのようなヒントを与えてくれるのか、豊富な写真を交えながらお話しいただきました。10月18日には、本展の時代背景とも重なる映画「ル・コルビュジエとアイリーン 追憶のヴィラ」を上映。翌19日には、こどものイベント「たてものタイムリープ！世界の有名なおうちと未来のおうち」を実施し、30年後の理想の住まいについて考えました。さらに25日には「館長をいっしょ！」（前号参照）、12月17日には「リビングでくつろぐ」ように楽しむジャズ・コンサートを開催。学芸員による解説会は計5回実施し、10月12日は恒例の「ゆっくり解説会」、11月15日は横尾忠則現代美術館との連携企画、12月13日と27日はAndo Galleryギャラリートーク付きのスペシャル解説会としました。会期中にSNS企画として行ったクイズや「住まいの総選挙」（1位は「聴竹居」）も展覧会を盛り上げました。

（林 優／当館学芸員）



記念講演会の様子



こどものイベント 未来の住まいを発表

## こどものイベントの新春企画！

1月31日にこどものイベント「新春！たてものツアー！2026」を開催しました。このツアーのきっかけは、これまでイベントに参加してくれた子どもから寄せられた「床から天井までの高さを知りたい」という質問でした。そんな子どもたちのリクエストを受け、今回は建築担当の中谷圭佑学芸員が美術館の建物をご案内。小学校の教室約450室分（！）もの延床面積を誇る当館、見どころはたくさんあります。なかでも今回子どもたちに人気だったのは、円形階段の一番下にある隙間のひみつや、大階段の内側にある謎の空間、そして風のデッキにある青木野枝さんの作品がどのように固定されているのか（みなさんも気になるでしょう）。ツアー後には保護者も合流し、全員で「ツアーほうこくか



たてものツアーの様子

い」を行いました。子どもたちの発見や学びが次々と発表され、楽しく有意義な時間となりました。安藤忠雄さん設計の当館、絵画や彫刻だけでなく、ぜひ建物そのものにも目を向けて楽しんでいただけたら嬉しいです。

（小田美沙紀／当館エドゥケーター）

トピックス

## コレクション展Ⅱ関連事業

阪神・淡路大震災から31年を迎えた1月17日の「ひょうご安全の日」、「特集 瀬川コレクションの名品」に合わせたメモリアルトーク&レクチャーを開催しました。旧瀬川美術館から引き継がれた名品の魅力と来歴を、担当学芸員が紹介しました。雪の舞い散る2月8日には、「兵庫のベスト・オブ・ベスト」に連動した手話通訳・要約筆記付きの「ゆっくり解説会」を行い、じっくりと作品に向き合う時間を設けました。また、記念講演会では、京都工芸繊維大学美術工芸資料館特定教授の並木誠士氏が登壇。瀬川コレクションを代表する「三保松原図」（P1参照）を中軸に据え、「名所絵」と「水墨画」の二つの側面から、その真価を丁寧に解き明かされました。さらに、2月21日のこどもイベント「書の世界へようこそ！」や、3月1日の「古代鏡五国巡回展示」に関連した長濱誠司氏（兵庫県立考古博物館加西分館「古代鏡展示館」学芸員）による特別レクチャー「古代鏡の魅力」など、多岐にわたる事業を展開し、いずれも盛況のうちに終了しました。

（柏木知子／当館学芸員）



記念講演会の様子

●——編集後記  
●開館以来、特別展を3階、コレクション展を1・2階で開催してきた当館ですが、設備メンテナンスの都合により、約1年間にわたり、展示室の入れ替えを行います（特別展→1階、コレクション展→3・2階）。展示する場所が変わることで、作品の見え方や印象が変わることは、「兵庫のベスト・オブ・ベスト」や本年度の県展（原田の森ギャラリーから当館ギャラリー棟へ移動）でも実感しているところです。

●本年度最終号となりました。1階展示室にて3月25日から開催の特別展「アンチ・アクション」については、次号でお伝えいたします。（林）

兵庫県立美術館

quarterly report  
ART RAMBLE  
VOL.90

2026年3月25日発行  
編集・発行：兵庫県立美術館  
〒651-0073

神戸市中央区臨浜海岸通1-1-1  
印刷：ウニスガ印刷株式会社

# 研究をつなぐアーカイブ

## —小澤文庫

橋本こずえ



2004年、ニューヨークの自宅のサラ夫人と小澤律子氏

### 美術館の周縁

2025年に開催した「藤田嗣治×国吉康雄：二人のパラレル・キャリアー百年目の再会」展の準備中に、小澤善雄著『評伝 国吉康雄』を何度も手にとった。そのあとがきは次のように締めくくられている。

終りに言葉でつくせない感謝の心を妻の律子にささげたい。長い間資料の整理に当たってくれただけでなく、原稿にまで目を通してくれた努力は、私のもつれば断念しようかとする気持ちを何度もふり立たせてくれるものであった。ありがとう。<sup>1</sup>

小澤善雄氏（1942-2017）は、アメリカ研究所を擁する同志社大学で国吉作品について研究した。修士課程で東洋史を学んだ後、さらなる国吉調査のために博士課程でマサチューセッツ州アマースト大学へ留学する。1968年に善雄氏は、のちにパートナーとなる律子氏（1936-）と出会う。彼女は、同州ノーサンプトンのスミス大学図書館で貴重文庫キュレーターを20年以上務めた日系アメリカ人である。律子氏は、翌年の夏から当時存命していた多くの関係者たちに連絡をとり、資料を探し、時に運転手として国吉の調査を手伝い始めた。3年ほどかけて各地で実施したインタビューでは、律子氏が一人で話を聞くことも多かったという。

最初に会ったのはニューヨーク近代美術館の写真部門で勤務していた国吉の妻、サラ・マゾ・クニヨシで、律子氏は2006年にサラが亡くなるまで親交を重ねた。国吉はサラに日本の多くを語らず、家族や友人についても知らなかったという。ホイットニー美術館館長であった国吉の友人、ロイド・グッドリッジは小澤夫妻を歓迎し、休日の美術館で資料を複写する機会を与えた。最初の妻、画家のキャサリン・シュミットは、愛情深く面倒見のよい「ジュエイッシュ・マザー」のような存在だったが、結婚生活は続かなかった。離婚後も親しい友人であり、国吉はいつも版画の最初の刷りをアトリエから自転車に乗って持って行き、彼女に贈った。国吉が手に入れたお気に入りの木馬のうち1体は、小澤夫妻が訪れたロードアイランドのキャサリンの家の庭に飾られていた。親友で画家の臼井文平は、国吉作品の額縁を制作したことで知られている。国吉は自分の作品の処分を任せると信頼を寄せており、臼井によって学生時代の貴重なリトグラフが残された。国吉のかつての教え子たちにも面会し、中には彼を崇拜する人もいれば、近寄りたがたい印象を持った人もいたという。筆者は、関係者たちが国吉に愛情と敬意を抱いていたこと、「ヤス」の思い出を懐かしそうに語る様子を、律子氏からお聞きする機会を得た。

1974年に刊行された『評伝 国吉康雄』は、小澤善雄氏の論考を支える調査

を律子氏が担い、出版社での「缶詰め」も含めて二人で完成した著作であったが、不満が残されたという<sup>2</sup>。刊行翌年、アメリカ・日本・カナダを巡回した大規模な国吉展が開催された。本書は広く日本で読まれるようになり、それまで日本にわずかしかなかった国吉作品が、国内でも収集対象とされるようになる。国吉が契約していたダウタウン画廊のオークションでは、投機目的の日本人同士によって作品の価格が吊り上げられたという。その様子を目撃したグッドリッジは、「国吉のために嬉しいけれど、信じられない」と小澤夫妻に語った。1986年に日本に帰国した二人は、国吉作品への熱狂から距離をとった。

一方で、国吉の出身地岡山を拠点とする福武書店の創設者の福武哲彦氏が1979年に国吉作品を目にし、世界有数の国吉コレクションの収集が始まっていた。さらに、1990年に福武本社ビルに国吉康雄美術館<sup>3</sup>が開館し、収集作品を公開することとなる。一度は国吉研究から離れた小澤夫妻であったが、開館準備の協力依頼を受けて、善雄氏は顧問、律子氏はキュレーターを務めることとなった。二人は、日本で国吉が「日本人画家」と考えられていたことに疑問を抱き、「アメリカ人画家」としての評価を資料によって正当に裏付けるため、そして、その情報を多くの人に公開するため、美術館の活動において、作品の収集・展示・保管と同じ重要性を資料の収集・整理・展示に置くことを提案した<sup>4</sup>。その後、律子氏はすぐに、スミソニアン・インスティテューションのアーカイブス・オブ・アメリカン・アートの関連資料の複写を依頼し、国吉、ダウタウン画廊、ホイットニー美術館という分類を踏襲するとともに、あらたに年次ファイルと作品別ファイルを作成した。さらに、全米各地の美術館や研究機関、日本の協力者、そしてサラ夫人から貴重な資料の提供を受けてアーカイブが形成された。

多くの研究者たちに開かれてきたアーカイブは、現在、岡山大学の国吉康雄記念研究講座で「小澤文庫」として管理されている。「小澤文庫」で調査させていただいた筆者は、膨大な資料を前に何度も圧倒された。すべてを紐解くことは不可能であり、分類された一部を活用したに過ぎない。しかし、焦ることはない。時を重ねることで、アーカイブはさらに新たな視点から読み解かれていくだろう。小澤律子氏からは、アーカイブの可能性と重要性、そして、ゆたかな思い出を惜しみなくお教えいただいた。この場を借りて、展覧会開催にあたり、多くの方々、機関にご協力いただいたことに改めて御礼を申し上げたい。

（はしもと・こずえ／当館学芸員）

1 小澤善雄『評伝 国吉康雄—幻夢と彩感』福武書店、1991年、258頁（初版は『評伝 国吉康雄』として新潮社から1974年に発行）。

2 小澤、前掲書、259頁。

3 2003年閉館。

4 小澤律子「国吉康雄アーカイブスの形成とAAAのこと」『現代の眼 東京国立近代美術館ニュース』523号、東京国立近代美術館、2000年8-9月号、8-9頁。